

NEJIREBANE, No. 123, 25. Dec., 2008

## ミスジホソカタムシ属の日本未記録種

*Leptoglyphus orientalis* (Coleoptera, Bothrideridae) Newly Found from Japan

By Jun-ichi AOKI and Yukihiro HIRANO

青木 淳一

〒106-0031 東京都港区西麻布 3-8-12

平野 幸彦

〒250-0865 神奈川県小田原市蓮正寺 585-29

ムキヒゲホソカタムシ科のミスジホソカタムシ属 *Leptoglyphus* はアジアに限って分布し、6種が知られている (ŚLIPIŃSKI *et al.*, 1989). 日本ではミスジホソカタムシ *Leptoglyphus vittatus* SHARP, 1885 が熊本県入吉市および鹿児島県下甕島から報告されているが、今回それとは別の種が田中 勇氏 (西宮市) によって奈良県で発見され、その後、共著者の一人の平野によって鹿児島県でも発見された。研究の結果、本種はスマトラから記載された *Leptoglyphus orientalis* GROUVELLE, 1906 であると判定され、ここに日本新記録種として報告する。

タナカミスジホソカタムシ (新称) *Leptoglyphus orientalis* GROUVELLE, 1906

(図1-3)

[形態的特徴] 頭部の幅は前胸背の幅の2/3、小さい点刻があり、横向きに生ずる毛を伴う。複眼に接する部分には隆起などはない。触角 (図2) は9節からなり、第4・5節が最も小さく、第3節はそれよりも長く、第2節はさらに長く太い。第6-8節は徐々に大きさを増し、極めて大きく膨らんだ球桿部 (第9節) につながる。球桿部 (第9節) は横溝によって明瞭に二つの部分に区切られる。前胸背板縦横同長か、長さよりもわずかに幅広く、側縁が前方寄りで緩やかに膨らみ、そこ

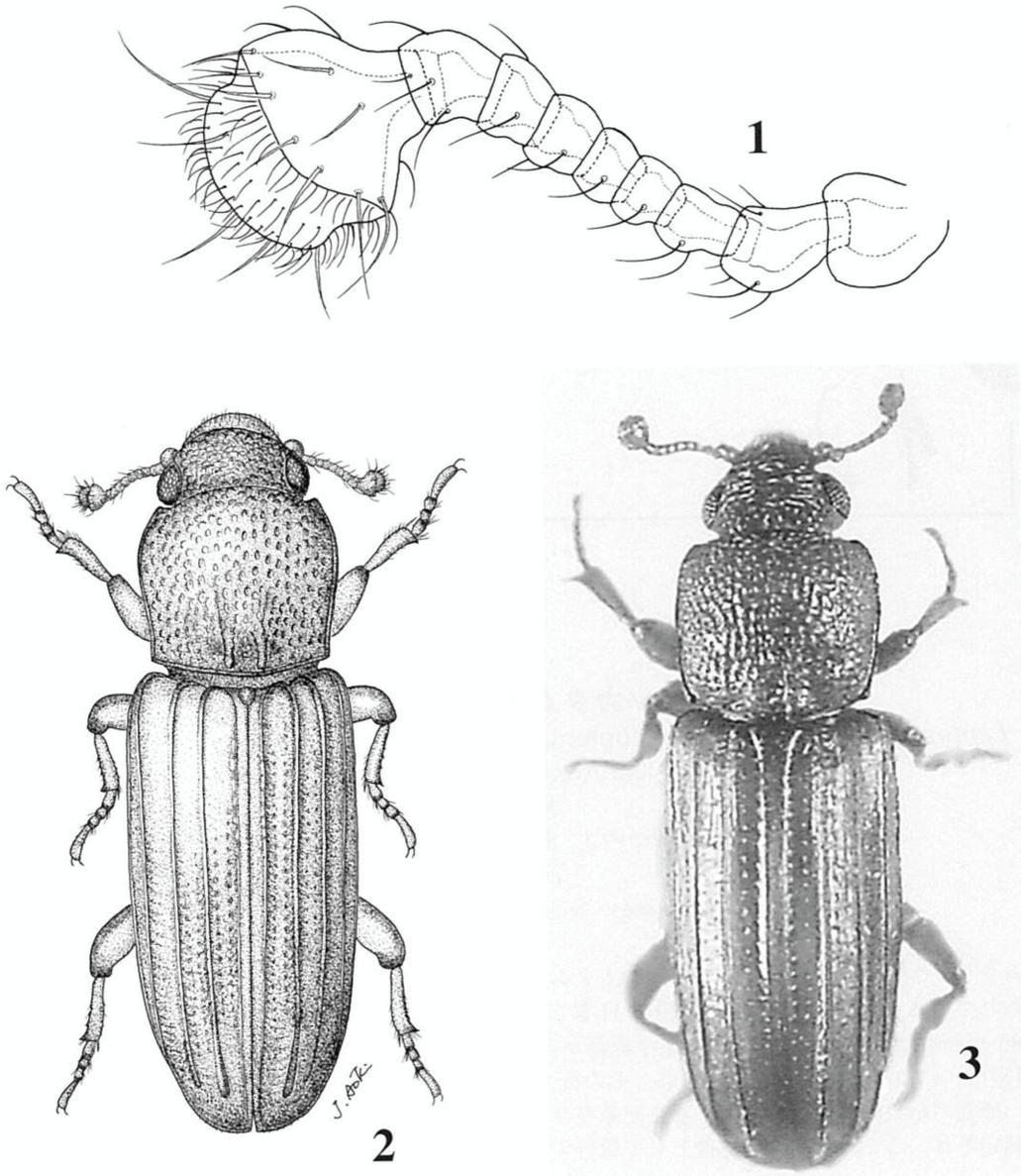


図1-3 タナカミスジホソカタムシ *Leptoglyphus orientalis* GROUVELLE 1. 触角 2. 全形図 3. 全形写真 (平野撮影)

で最大幅を示す(図1)。前角は鈍く角張って小さく突出し、後角は直角よりもやや鈍く(約100度)角張る。表面は縦長卵形の粗大点刻によって密に覆われ、各点刻から1本ずつ前方に向く細く短い毛を生ずる。後縁中央から前方中部に向かって1対の弱く短い縦隆起線が走る。上翅(図の標本では上翅が少し右方に傾いている)はそれぞれ明瞭な3本の縦隆起線をもち、そのうちの第1・第2隆起線は上翅の先端手前で消失する。第3隆起線は上翅末端で側線とつながる。各隆起線の基部はや

や暗色となり、第1隆起線の先端部は徐々に太まり、強く高まって暗褐色を呈する。隆起線間には2列の小点刻があるが、極めて弱く不明瞭で見にくい。プレパラート標本にしないとよく見えないが、3対の縦隆起線に沿って微小な毛が生えており、それは上翅の先端に向かって長さや密度を増していく。脛節の末端には背側に鋭い突起、腹側に顕著な棘を備える。前・中・後附節ともに附節各節の長さは第4 > 第1 > 第2 > 第3節の順で、第4節は第1-第3節を合わせたものよりも短い。体長 1.8-2.2 mm。

[採集記録] 1頭：奈良県奈良市奈良公園, 28. I. 2006, 田中勇採集。12頭：鹿児島県薩摩川内市市川永野, 9. V. 2008, 平野幸彦採集。1頭：広島県安芸太田町加計, 1. X. 2007, 平野幸彦採集。

[分布] 本州, 九州; スマトラ, ジャワ。

#### ミスジホソカタムシ属 *Leptoglyphus* の6種の検索表

1. 前胸背板は側縁中央が角張って突出し、あきらかな六角形をなす…………… 2  
— 前胸背板は側縁がゆるやかに膨らみ、六角形をなすことはない…………… 5
2. 複眼の内側に顕著な鶏冠状の突起がある；上翅隆起線間の点刻列は不明瞭；体長2.50 mm (セイロン)…………… *L. cristatus* SHARP, 1885  
— 複眼の内側に顕著な鶏冠状突起はない。上翅隆起線間の点刻列は明瞭…………… 3
3. 触角球桿部は長卵形。体長 2.30 mm (インド)…………… *L. foveifrons* GROUVELLE, 1908  
— 触角球桿部はほぼ円形…………… 4
4. 前胸背板は上翅より幅狭い。体長 3.50 mm (日本)…………… *L. vittatus* SHARP, 1885  
— 前胸背板は上翅より幅広い。体長 2.05-2.20 mm (ベトナム)…………… *L. pubescens* (DAJOZ, 1979)
5. 上翅は長く、幅の3倍の長さ。体長 2.8 mm (ビルマ)…………… *L. feae* GROUVELLE, 1896  
— 上翅は短く、幅のおよそ2倍の長さ。体長 1.8-2.2 mm (スマトラ・日本)…………… *L. orientalis* GROUVELLE, 1906

本種は、その姿形や体色から一見してイノウエホソカタムシ属 *Antibothrus* のものによく似ているが、触角が9節しかないことにより、触角が11節の上記の属と区別される。二つの産地によってやや形態を異にし、奈良産のものは鹿児島産のものに比べてやや大型で、上翅の第1隆起線の先端の高まりが弱い。

<謝辞>日本における本種の第1発見者である田中勇氏(西宮市)は貴重な標本を研究のために貸与して下さった。ここに氏のお名前を和名に冠することにより、謝意を表したい。

#### <関連文献>

- DAJOZ, R., 1979. Coléoptères Colydiidae nouveaux ou peu connus des environs de Saigon. *Bull. Soc. Ent. France*, **84**: 233-239.
- GROUVELLE, A., 1896. Descriptions de Clavicornes d'Afrique et de Madagascar. *Ann. Soc. Ent. France*: 71-94.
- GROUVELLE, A., 1906. Nitidulides, Colydiides, Cucujides, Monotomides et Helmidés nouveaux. *Rev. Ent. Caen*, **25**: 113-131.
- GROUVELLE, A., 1908. Coléoptères de la région Indienne. Rhysodidae, Trogostidae, Nitidukidae, Colydiidae, Cucujidae (1er memoire). *Ann. Soc. Ent. France*, **78**: 315-495.
- SHARP, D., 1885a. On the Colydiidae collected by Mr. G. LEWIS in Japan. *J. Linn. Soc. London*, **19**: 58-84, pl.3.
- SHARP, D., 1885b. On some Colydiidae obtained by Mr. LEWIS in Ceylon. *J. Linn. Soc. London*, **19**: 117-131, pl.6.
- SLIPINSKI, S. A., R. D. POPE & R. J. W. ALDRIDGE (1989) A review of the world Bothriderini (Coleoptera, Bothrideridae). *Bull. Ent. Pologne*, **59**: 131-202.

## 昆虫の和名についての私見

大澤省三

〒732-0067 広島市東区牛田旭2丁目4番7-1003号 E-mail: oswasyo@nifty.com

このところ、昆虫の和名についての議論が紙面を賑わせている。藤田(2008, p. 77)は「学名なしに読む人にきちんと伝わること・・・これが“標準和名”の意味である」と述べている。ここに引用した部分に限れば原則的にはそのとおりであり異論を挟むつもりはない。現在の“標準和名”とは、一般の虫屋の間に“定着”した和名と云えるかもしれない。私はアマチュアの甲虫屋で、甲虫以外のことにはうとく、昆虫全体について議論を展開する能力がない。したがって、以下の私説は主体を甲虫においた。

今日、標準和名として定着しているものの大部分の出典は「原色昆虫大図鑑・甲虫編」(北隆館, 1963)と「原色日本甲虫図鑑 I-IV」(保育社, 1984-1986)だが、これらにないもの(新しく記載されたものなど)も存在する。問題はこれらの標準和名が、“標準”として問題がないかどうかという点にある。二つの図鑑は共に相当数の専門家の分担執筆である。全体を眺めてみると和名の取り扱いがかならずしも統一されておらず、事前のルール作りの打ち合わせが充分でなかったようである。さらに、これら2つの図鑑の間で同一種に対して異なる和名が用いられている例もある。以下、私の気がついた問題点を列挙し、それらにたいしてコメントしてみたい。

(1) 和名の最後にムシをつけたほうが適当と思われるものはムシを省略しない。例えば、保育社の図鑑ではオオキノコムシ科の種の和名にはムシを省略しxxx オオキノコとなっているが(オオキノコムシ *Encaustes praeobilis* だけはムシの省略なし)、デオキノコムシ科ではすべてxxx デオキノコムシとムシが入っている。テントウムシダマシ科の種名もすべてテントウダマシとなっている。ムシを省略する方式は、古く松村松年や、彼の指導をうけた平山修次郎が用いているが、今日では採用されていないし、適当とは思われない。ハンミョウ、ホタル、ジョウカイなどにムシを付けるわけにはいかないが、一般にはムシを付けるよう統一する。とくにオオキノコなどはキノコではないのだから、ムシを付けるべきであると考え。私見ではオオキノコムシ科という和名自身にも問題がある。熱帯、亜熱帯には大型のオオキノコムシも多数いるし、新大陸には日本のオオキノコムシとは似ても似つかぬものがある。一方、日本(やそれ以外の地域でも)のオオキノコムシは、*Tritoma*, *Triplax*, *Dacne* など、小型のものが多いためオオキノコムシ科という科名はあまり適当とは思えない。単に、キノコムシ科としたほうがいいのではなからうか。そうすればxxx チビオオキノコムシなどという、奇妙な和名を付けなくてもすむ(なお、チビは差別用語で、本来使用すべきでない)。

(2) 複数の種をふくむグループでは、科、族、属といった上位分類群の名称をそのまま特定の種の和名にしない。野村(2008, p.35)は「ゲンゴロウ」や「タマムシ」・・・「コガシラミズムシ」や「ミズスマシ」や「カワラゴミムシ」なども科名(総称)と種の和名が同じである。・・・これらをすべて改称の対象とするのは今の段階では現実的でない・・・」と述べている(野村が挙げているもの以外にも、上位分類群の名称とそこに含まれる特定の種の和名が同じである例は、ハンミョウ、ガムシ、エンマムシ、ゴミムシ、オオキノコムシ、ゴミムシダマシ、マグソコガネなど多数あることは事実である)。しかしながら、これらの和名のすべてが、藤田が主張するように「学名なしに読むひとにきちんとつたわる」であろうか? 例えば、「石をどけたら下にゴミムシがいた」と書かれてそれがゴミムシ類の1種を指すのか、あるいはより具体的に *Anisodactylus signatus* を指しているのか、判別できるだろうか? 「XXX山のオオキノコムシ」という報文の題名だけをみて、オオキノコムシ科全般を指しているのか、*Encaustes praeobilis* だけの記録なのか判断でききるだろうか? つまり、科や属などの名称をそのまま種の和名として使うのは時に混乱のもととなりかね

ないのである。後にも述べるように、種名にはできるだけ適当な接頭辞をつけるほうがわかりやすい。野村 (2008, p.35) はその実現性に疑問を呈しているが、そのような試みはすでに古く松村松年や平山修次郎によって行なわれていて、現行の和名より合理的だと私は思っている。例えば今日の標準和名とされるハンミョウはナミハンミョウ、タマムシはヤマトタマムシ、ガムシはオオガムシ、ゲンゴロウはナミゲンゴロウ、エンマムシはジエケルエンマ (ムシ)、コガネムシはナミコガネ、ネプトクワガタはヤマトネプトクワガタ、テントウムシはナミテントウ、等々である。松村-平山ラインの和名がその合理性にも関わらず定着しなかったのは、松村と当時の他の有力昆虫学者の対立が主な原因で、合理性の問題ではないと私は理解している。稀に例外があり、*Scaphidium japonicum* はデオキノコムシとされていたものが、平山の図鑑 (1945) ではヤマトデオキノコ (ムシ) となっており、現在の標準和名もヤマトデオキノコムシである。また、クワガタは古くはクワガタムシとされていたようで、神谷・安立 (1933) はコクハ (ワ) ガタ (現在の標準和名) としながらも、「一名クハ (ワ) ガタムシとも称す」とあるから、クワガタムシは不適当と考え、改称されたと考えられる。さらに、北盛館の図鑑ではハムシの xxx トゲトゲは、保育社の図鑑では xxx トゲハムシと改称されている。また、杉本 (2005) はタマムシではなく、ヤマトタマムシを使用している。これらの処置こそ正しい姿であろう。

さて、上の問題にも関連するが、昨今はルリクワガタ属各種の和名についての議論がかまびすしい。私はこの問題に詳しくないが、この発端は井村 (2007) により、従来用いられてきた和名の一部に対し、改称案が提唱されたことに起因しているようである。日本のルリクワガタ属は当初、ただ一種と思われていたので、ルリクワガタという和名が用いられていた。しかし、黒澤 (1969) により第2の種が発見され、コルリクワガタという和名が与えられた。その後さらに2新種が記載され、しばらくは日本産ルリクワガタ属4種説が定着していたが、ごく最近になってニセコルリクワガタが3種に分けられたり、タカネルリクワガタという新種が発見されたりして種数が増加するに及び、それらの和名をめぐる議論が沸騰し始めた。(さらに、中国、ヨーロッパ、アメリカなどのものを加える種数は大幅に増える)。ここではそのうちの一つ、「ルリクワガタ」を例にとってみよう。上にも述べたように、ただ単に「ルリクワガタ」と書いただけでは、種 *Platycerus delicatulus* を指すのか属全般を指すのか分からない。さらにもっと重要な点として、古い文献に記された「ルリクワガタ」という名の中には複数の異なる種が含まれてしまうので、後基準標本によって定義される今日的な意味での *Platycerus delicatulus* を指しているとは限らず、ルリクワガタ属の種数がここまで増えたことを考えると、引用の際に大きな誤りが生じてしまう可能性もある。主としてこのような理由から、井村 (2007) は *Platycerus delicatulus* の種名をただのルリクワガタからオオルリクワガタに改称してはどうかと提唱したわけであるが、この主張はこれまで私が上に書いた趣旨に合うものとして支持したい。まったく別の観点から、コルリクワガタの中にはオオルリより大型のものもあるので「オオ」という接頭辞は不適切だという意見もあるようだが、一般的にみて後者は前者より大型であるし (保育社の図鑑によれば、体長は *P. delicatulus* が♂ 9-13 mm, ♀ 9-12 mm に対して *P. acuticollis* が♂ 8-11 mm, ♀ 8-10 mm)、♂の大顎もはるかに大きく発達するため、*P. delicatulus* をオオルリクワガタとするのはおかしくない。もしそれがおかしいというのであれば、そもそも *P. acuticollis* にコルリという和名を与えたこと自体がおかしいということになる。*Platycerus* については、この他にもまだ複雑な問題があるようだが、総合的な論評は私の手に余るので省略する。

これらの議論に関連して、1, 2他の例を挙げておきたい。すでに述べたように、ルリクワガタ類に限らず、一般的に同属+近縁属内に多数の種が含まれる場合は原則として接頭辞を語幹の前につけるほうが望ましい。たとえば、ビロウドコガネ類などは多数の種を包含しており、ビロウドコガネと書かれただけでは、*Maladera japonica* をさすと察知するのは、その類によほど詳しくないと難しい。たとえばヤマトビロウドコガネとすればより分かりやすい。クワガタムシ類なども、グローバルな観点から、日本のものは、たとえばヤマトノコギリクワガタ、ヤマトオオクワガタなどと

したらどうであろうか。ネプトクワガタについては、すでに述べたように、平山 (1945) はヤマトネプトクワガタを使用している。

(3) 形態上明らかに齟齬をきたしている和名は改名する。例えば xxx チビオオキノコムシ (チビ+オオ), マルガタカケケシキスイ (マルガタ+カケ), コブナシコブスジコガネ (コブナシ+コブスジ) などは標準和名としてふさわしいとは思われない。もう少し整然と再検討すべきで、いたずらに定着性を持ち出すのは納得しがたい。また、差別用語など、不都合な用語を含む和名は、変えるべきであろう。なお、今日の標準和名には、由来の古い名前がかなりあり、現在一般的にもちいられている日本語からするとその意味が明らかでないものが存在する。例えば、オサムシ、ジョウカイ、ハンミョウなどであるが、それらまで改称するのは現実的でない。語源を知りたければ、荒俣 (1991) がかなり参考になる。

(4) 合理的に改名されたものは標準和名として定着させる。甲虫以外で気のついたこととしては、まずウスバシロチョウやウスバキチョウからウスバアゲハ、キイロウスバアゲハへの改称である。これらのチョウは明らかにアゲハでシロチョウではないのだから xxx ウスバアゲハとした方がはるかに合理的で、これに反対する意見には同調しがたい。和名にはそれなりの科学的合理性を付与すべきである。“キマダラヒカゲ”の中に異なる2種存在することがわかり、現在ではサトキマダラヒカゲとヤマキマダラヒカゲの和名が定着している。これまで1種とされていたものが複数種存在することが判明したのだから、キマダラヒカゲの和名を廃し、サトとヤマを標準和名とするのは合理的である。藤田は「両方の種にすでに学名があった」ので、ルリクワガタ-オオルリクワガタの場合とは事情が違ふと述べているが、「両方の種にすでに学名があった」のと「新種が発見されて2つの学名が存在するようになった」のとの間に、何ら本質的な違いはないと思う。要は主として虫屋が標準とする図鑑の“定着した”和名にもいろいろな問題点があるので、伝統だけでなく、合理性を加味した標準和名を確立し、定着させることが指導的立場にある人の義務だということである。

(5) “亜種”には和名をつけない。これについては、別に大澤 (2008) が議論したので詳細はそれを参照されたい。佐々治 (1989, p.41) に従えば“亜種とは明らかに区別できる、地理的に異なった分布圏をもった集団で、地理的隔離さえ除去すれば生殖的には隔離されていないもの”である。しかし、今日、この亜種の条件を満たしていると実証されたケースはほとんどなく、明らかに亜種ではない変異型も亜種とされている場合がかなり存在する。佐々治 (l.c.) は“「種とするほどの違いはないが、明確に区別できるので亜種程度にしておこう」というセンスで亜種を考えるのは誤りである・・・「変種」、「型」などの名称は命名規約の適用を受けないからと言って、とりあえず亜種にしておこうなどというのはもってのほかである”と述べている。例えばオオオサムシ *Ohomopterus dehaanii* の亜種とされるチュウブオオオサムシ *Ohomopterus dehaanii* subsp. *punctostriatus* はオオオサムシとマヤサンオサムシの安定化した雑種由来集団で、純粋の亜種ではない。なお、*punctostriatus* は北隆館の図鑑では変種 (var.) となっているが、保育社の図鑑以来、根拠を示すことなく亜種 (subsp.) とされてきたという経緯がある。このような不安定な現状を考えると種の学名は2名法を基本とすべきかもしれない (ただし、現行では国際動物命名規約の壁があり、3名法を存続させるか廃止するかは将来に残された課題である)。したがって、当面は、変種、型などをふくめ、すべての“亜種”を型 (form, 略して f., 例えば f.A, f.B, f.C など) とし、和名は付けずに、産地を記すにとどめるのも一案であろう。例: チュウブオオオサムシ *Ohomopterus dehaanii* f. A オオオサムシA型(産地名)。上記のように処置すれば、藤田 (2008, p.70) のノコギリクワガタ類についての悩みなどはある程度解消されよう。

(6) 亜種の和名についてのさらなる問題。私たち (富永ら, 2008) の最近の研究で、ミヤジマトンボ *Orthetrum poecilops miyajimaense* は、*poecilops* の亜種ではなく、中国西南部に分布する *poecilops* の基亜種の synonym であることを形態、生態、DNA 系統樹、地史などのデータから推定した。中国の基亜種には和名がないが、ミヤジマトンボとするわけにもいかず、ざりとて新和名を付けると、宮島のものにたいして、これまで用いられてきた標準和名ミヤジマトンボは消滅してし

まう。悩ましいところである。当面、中国の基亜種には和名をつけない、とするのが現実的な解決法であろう。

#### <参考文献>

- 藤田 宏, 2008. 標準和名への道4 昆虫の和名を考える. 月刊むし, No. 450: 64-77.  
 原色甲虫図鑑 (I-IV), 1984-1986. 保育社.  
 原色昆虫大図鑑・甲虫編, 1963. 北隆館.  
 野村周平, 2008. 2007の昆虫界を振り返って, 甲虫界. 月刊むし, No. 447: 30-51.  
 平山修次郎, 1945. 原色甲虫図譜, 三省堂.  
 神谷一男・安立綱光, 1933. 原色甲虫図譜, 三省堂.  
 杉本雅志, 2005. 今月のむし ヤマトタムシ. 月刊むし, No. 409: 1.  
 KUROSAWA, Y., 1969. A revision of the genus *Platycerus* (Coleoptera, Lucanidae) from Japan. *Bull. Natnl. Sci. Mus., Tokyo*, **12**: 475-485.  
 IMURA, Y., 2007. Endophalic structure of the genus *Platycerus* (Coleoptera, Lucanidae) of Japan, with description of two new species. *Elytra*, **35**: 45-51.  
 荒俣 宏, 1991. 世界大博物図鑑 1. 虫類, 平凡社.  
 大澤省三, 2008. DNAと昆虫の分類. 昆虫 DNA 研究会ニュースレター, 9: 1-6.  
 佐々治寛之, 1989. 動物分類学入門. 東京大学出版会.  
 富永 修・鍵本文吾・水田国康・蘇 智慧・大澤省三, 2008. ミヤジマトンボのきた道, 昆虫 DNA 研究会ニュースレター, 9: 33-51.

## キドマルテントウダマシの採集記録 Records of *Bystodes kidoi* SASAJI (Endomychidae)

By Nobuyuki NARUKAWA  
 生川 展行

〒513-0015 三重県鈴鹿市木田町 2399

*Bystodes kidoi* SASAJI キドマルテントウダマシは, SASAJI (1990) により福岡県城山で得られた標本に基づき記載された種で, その後岐阜県可児市 (豊島, 2007), 三重県四日市市, 鈴鹿市 (生川, 1998; 生川ほか, 2008), 徳島県徳島市 (河上, 2002), トカラ列島悪石島, 中之島 (上野, 1993) で記録されている. 今回筆者は, 群馬県, 大阪府及び兵庫県で採集された標本を検査することができたので, 報告しておく.

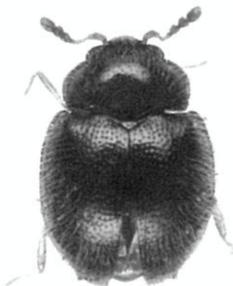


写真 キドマルテントウダマシ (渡良瀬川産)

なお, 貴重な標本を検査する機会を与えていただいた大川秀雄, 田中勇の両氏及び, 標本写真を撮影していただいた稲垣政志氏に, 心よりお礼申し上げます.

1♂, 群馬県館林市大島渡良瀬川, 16. VI. 2006, 大川秀雄採集, 筆者保管.

この個体は, 大川・内山 (2008) により *Dexialia minor* (CHŪJŌ) ヒメマルガタテントウダマシとして記録された個体であるが, 採集者である大川秀雄氏にお願いして再度標本を確認した結果, キドマルテントウダマシであった.

8 exs., 大阪府三島郡島本町江川水無瀬ゴルフ場周辺桂川右岸, 25. IV. 2006, 田中勇採集; 8 exs., 同採集場所, 9. XI. 2006, 田中勇採集.

1 ex., 兵庫県尼崎市武庫豊町武庫川甲武橋左岸, 4. IV. 2000, 田中勇採集.

なお本種は、三重県では河川の枯れたヨシから採集されることが多いため、今後このような環境での調査が進めば、各地で見つかる可能性が高いと思われる。

#### <参考文献>

- 河上康子, 2002. 徳島県吉野川河口地域における甲虫調査. *ねじればね*, (103): 6-13.  
 生川展行, 1998. キドマルテントウダマシの多数採集例. *ねじればね*, (79): 8-9.  
 生川展行ほか, 2008. 第5章昆虫類第7節コウチュウ目. 鈴鹿市の自然-鈴鹿市自然環境調査報告書-: 525-691.  
 大川秀雄・内山裕司, 2008. 2-4. その他の昆虫 (トンボ・チョウ・ガを除く). 館林市史特別編第3巻 館林の自然と生きもの別冊 館林市史資料目録: 12-17.  
 豊島健太郎, 2007. コウチュウ目. 可見市史第4巻自然編目録: 106-176.  
 上野輝久, 1993. ヒラタムシ上科甲虫数種の分布記録. *福井虫報*, (12): 43-44.

## 大阪府泉南山地のヒメドロムシ Records on Elmidae and Dryopidae from Sennan Ranges, Osaka Prefecture, Honshu, Japan

By Osamu TOMINAGA

富永 修

〒630-8114 奈良市芝辻町 4-1-15 E-mail: osamushi@mug.biglobe.ne.jp

大阪府のヒメドロムシについては、初宿ら (2008) に大和川水系の一部として石川水系の記録が収録されている。また、生駒山系の大阪側と北摂山地の淀川水系については、現在調査が進められている。ここでは、大和川と淀川水系以外の泉南山地の河川のヒメドロムシの調査結果を報告する。大和川に流入せず、大阪湾に注ぐ、石川水系以西の二級河川である。

石川水系からは16種のヒメドロムシが記録されている (初宿ら (2008) では、ナガアシドロムシ属 *Grouvellinus* の2種とツヤドロムシ *Zaitzevia* の3種は区別されていない)。泉南山地からは、9種が得られ、別にドロムシ科の1種が得られた。ヒメドロムシ相は源流種と下流種を欠き、源流標高が低く、流長が短いという地形的特徴をよく表している。ナガアシドロムシ属 *Grouvellinus* はツヤナガアシドロムシ、ツヤドロムシ属 *Zaitzevia* はミゾツヤドロムシしか得られていない。小型種ではツヤヒメドロムシを欠き、ホソヒメドロムシが下流部まで産する。

#### ドロムシ科 Dryopidae

1. *Elmomorphus brevicornis brevicornis* SHARP ムナビロツヤドロムシ  
1 ex., 大阪府泉南郡岬町畑南方, 番川, 90-100 m, 8. IX. 2007.

#### ヒメドロムシ科 Elmidae

2. *Stenelmis nipponica* NOMURA イブシアシナガドロムシ  
5 exs., 大阪府泉南市信達童子畑北, 金熊寺川, 100 m; 3 exs., 大阪・和歌山県境阪南市・和歌山市境谷合流点, 山中川, 120 m; 1 ex., 阪南市桑畑~鳥取池, 井関川, 110 m, 6 exs., 和歌山県和歌山市滝畑, 山中川, 130 m, 8. IX. 2007. 7 exs., 大阪府泉南郡岬町上孝子高仙寺口, 大川, 60-70 m, 26. VIII. 2007.
3. *Ordobrevia gotoi* NOMURA ゴトウミゾドロムシ  
2 exs., 大阪府和泉市旧和泉市キャンプ場上流, 榎尾川, 190 m, 15. IX. 2007. 7 exs., 和泉市父鬼町乳滝下, 父鬼川, 220 m; 3 exs., 大岩谷合流下・イモ谷合流附近, 父鬼川, 240 m; 17 exs., フルタ谷合流附近, 父鬼川, 390 m, 18. VIII. 2007. 1 ex., 岸和田市牛滝川上流・カシ平

下, 牛滝川, 500 m, 25. VIII. 2007. 1 ex., 貝塚市蕎原, 近木川, 220 m, 15. IX. 2007. 5 exs., 和歌山県打田町栗ノ木川五本松越道分岐, 二ノ瀬川, 270–280 m, 15. IX. 2007. 4 exs., 大阪府阪南市桑畑～鳥取池, 井関川, 110 m; 1 ex., 泉南郡岬町畑南方, 番川, 90–100 m, 8. IX. 2007. 2 exs., 泉南郡岬町上孝子～逢帰ダム・浄水場下・並木橋, 大川, 100 m, 26. VIII. 2007.

<石川水系> 2 exs., 大阪府河内長野市千石谷・大滝上, 石川, 460 m; 6 exs., 千石谷・醤油谷合流上, 石川, 530 m, 11. VII. 2007.

4. *Ordobrevia maculata* (NOMURA) アカモンミゾドロムシ

2 exs., 大阪府和泉市施福寺裏コース登り口, 東横尾川, 280 m, 6. X. 2007. 2 exs., 旧和泉市キャンプ場上流, 横尾川, 190 m, 15. IX. 2007. 3 exs., 横尾山町下, 横尾川, 220 m, 6. X. 2007. 2 exs., 大岩谷合流下・イモ谷合流附近, 父鬼川, 240 m; 15 exs., 白川谷, 父鬼川, 370 m; 2 exs., フルタ谷合流附近, 父鬼川, 390 m; 11 exs., 奥笹尾谷合流附近, 父鬼川, 450 m, 18. VIII. 2007. 2 exs., 岸和田市牛滝町・大威徳寺・一の滝～錦秋の滝, 牛滝川, 300 m; 8 exs., 上流・カシ平下, 牛滝川, 500 m; 26 exs., 上流・ヘアピン上, 牛滝川, 590 m; 3 exs., 源流, 牛滝川, 700 m, 25. VIII. 2007. 1 ex., 塔原口, 津田川, 220 m; 17 exs., 和泉葛城山・葛城谷岳ノ谷出合, 津田川, 400 m; 6 exs., 和泉葛城山・葛城谷ホシキ谷出合, 津田川, 450 m, 15. IX. 2007. 10 exs., 貝塚市奥水間温泉上・落合橋, 近木川, 170 m; 1 ex., 梶谷川・梶谷・中ノ谷水源地, 近木川, 180 m; 1 ex., 蕎原, 近木川, 220 m; 4 exs., 蕎原～五本松・東手川本谷林道・本谷・宿ノ谷合流下, 近木川, 310 m; 7 exs., 蕎原～五本松・東手川ワカ谷合流附近, 近木川, 520 m; 5 exs., 蕎原～五本松・東手川ワカ谷～本谷, 近木川, 340–330 m, 15. IX. 2007. 6 exs., 泉佐野市不動谷・七宝滝寺不動明王上, 犬鳴川, 240 m; 6 exs., 不動谷・行者の滝上, 犬鳴川, 300 m; 9 exs., 不動谷・トンネル～犬鳴林道分岐, 犬鳴川, 400 m; 22 exs., 不動谷・トンネル～犬鳴林道分岐, 犬鳴川, 420 m; 6 exs., 不動谷・犬鳴林道分岐ゲート上, 犬鳴川, 470 m; 6 exs., 不動谷・源流, 犬鳴川, 570 m, 1. IX. 2007.

<石川水系> 7 exs., 大阪府河内長野市千石谷・大滝上, 石川, 460 m; 12 exs., 千石谷・醤油谷合流上, 石川, 530 m, 11. VII. 2007.

5. *Optioservus nitidus* NOMURA ツヤ (ヨツモン) ヒメドロムシ

7 exs., 大阪府和泉市布引不動尊, 東横尾川, 250 m; 4 exs., 旧和泉市キャンプ場上流, 横尾川, 190 m; 5 exs., 側川溪アセ谷下流, 父鬼川, 210 m, 15. IX. 2007. 4 exs., 父鬼町乳滝下, 父鬼川, 220 m; 19 exs., 大岩谷合流下・イモ谷合流附近, 父鬼川, 240 m; 2 exs., 白川谷, 父鬼川, 370 m; 42 exs., フルタ谷合流附近, 父鬼川, 390 m; 4 exs., 奥笹尾谷合流附近, 父鬼川, 450 m, 18. VIII. 2007. 2 exs., 春木川町ばれとめ地蔵, 松尾川, 100 m, 15. IX. 2007. 6 exs., 岸和田市内畑町山滝, 牛滝川, 90 m; 13 exs., 牛滝町・大威徳寺・一の滝～錦秋の滝, 牛滝川, 300 m; 3 exs., 牛滝川上流・カシ平下, 牛滝川, 500 m; 1 ex., 牛滝川上流・ヘアピン上, 牛滝川, 590 m, 25. VIII. 2007. 6 exs., 八王寺橋上流, 津田川, 160 m; 3 exs., 塔原口, 津田川, 220 m, 15. IX. 2007. 4 exs., 貝塚市上木積, 近木川, 160 m, 28. IX. 2007. 16 exs., 奥水間温泉上・落合橋, 近木川, 170 m; 1 ex., 蕎原～五本松・東手川ワカ谷合流附近, 近木川, 520 m; 1 ex., 蕎原～五本松・東手川ワカ谷～本谷, 近木川, 340–330 m, 15. IX. 2007. 3 exs., 不動谷・七宝滝寺不動明王上, 犬鳴川, 240 m; 9 exs., 不動谷・トンネル～犬鳴林道分岐, 犬鳴川, 400 m, 1. IX. 2007. 3 exs., 和歌山県打田町神通, 二ノ瀬川, 240 m; 5 exs., 栗ノ木川五本松越道分岐, 二ノ瀬川, 270–280 m, 15. IX. 2007. 3 exs., 大阪府泉佐野市上大木・一土庄橋, 壱井川, 140 m, 1. IX. 2007.

<石川水系> 7 exs., 大阪府河内長野市千石谷・大滝上, 石川, 460 m; 5 exs., 千石谷・醤油谷合流上, 石川, 530 m, 11. VII. 2007.

6. *Grouvellinus nitidus* NOMURA ツヤナガアシドロムシ

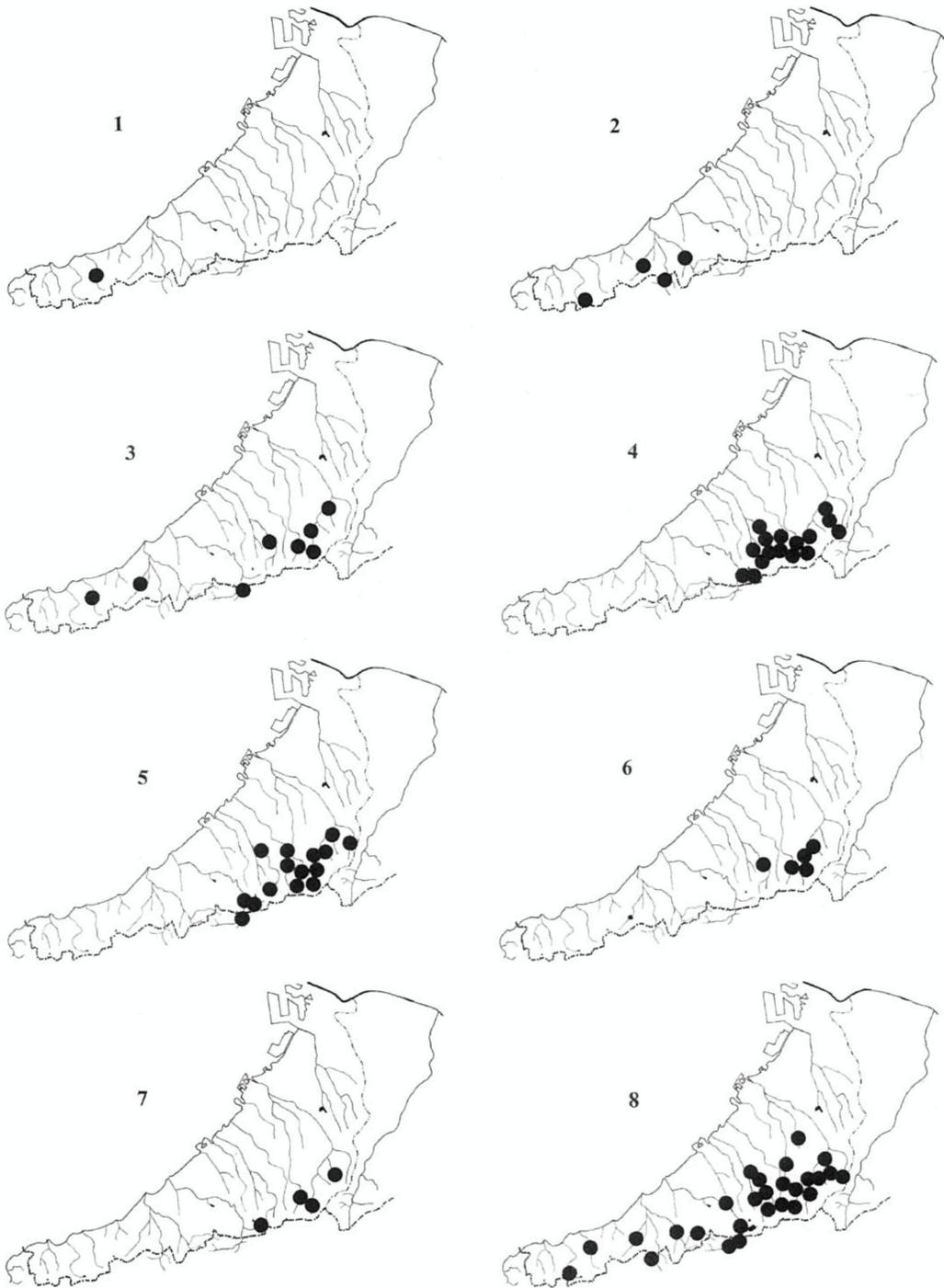
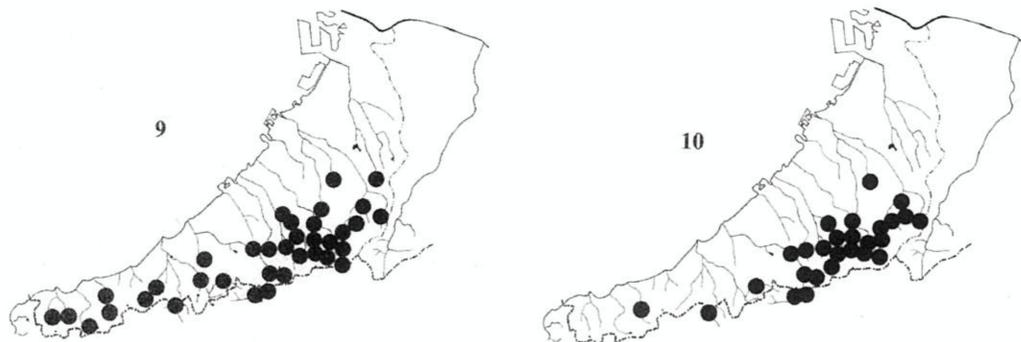


図1-10. 分布図：1. *Elmormorphus b. brevicornis* ムナビロツヤドロムシ, 2. *Stenelmis nipponica* イブシアシナガドロムシ, 3. *Ordobrevia gotoi* ゴトウミソドロムシ, 4. *Ordobrevia maculata* アカモンミソドロムシ, 5. *Optioservus nitidus* ツヤ (ヨツモン) ヒメドロムシ, 6. *Grouvellinus nitidus* ツヤナガアシドロムシ, 7. *Paramacronychus granulatus* ツブスジドロムシ, 8. *Zaitzeviaria gotoi* ホソヒメツヤドロムシ, 9. *Zaitzeviaria ovata* マルヒメツヤドロムシ, 10. *Zaitzevia rivalis* ミゾツヤドロムシ.



1 ex., 大阪府和泉市側川溪アセ谷下流, 父鬼川, 210 m, 15. IX. 2007. 1 ex., 和泉市大岩谷合流下・イモ谷合流附近, 父鬼川, 240 m; 1 ex., 白川谷, 父鬼川, 370 m; 1 ex., フルタ谷合流附近, 父鬼川, 390 m, 18. VIII. 2007. 1 ex., 岸和田市牛滝川上流・カシ平下, 牛滝川, 500 m, 25. VIII. 2007. 1 ex., 貝塚市稲谷川・大川・天神宮前, 近木川, 200 m, 28. IX. 2007. 6 exs., 貝塚市蕎原, 近木川, 220 m; 1 ex., 蕎原～五本松・東手川ドサ谷合流附近, 近木川, 520 m, 15. IX. 2007. 1 ex., 泉佐野市不動谷・犬鳴林道分岐ゲート上, 犬鳴川, 470 m, 1. IX. 2007. 1 ex., 和歌山県打田町神通, 二ノ瀬川, 240 m, 15. IX. 2007. 2 exs., 大阪府阪南市桑畑～鳥取池, 井関川, 110 m; 2 exs., 泉南郡岬町畑南方, 番川, 90-100 m, 8. IX. 2007.

7. *Paramacronychus granulatus* NOMURA ツブスジドロマシ

1 ex., 大阪府和泉市榎尾山町下, 榎尾川, 220 m, 6. X. 2007. 1 ex., 和泉市フルタ谷合流附近, 父鬼川, 390 m, 18. VIII. 2007. 1 ex., 岸和田市上流・カシ平下, 牛滝川, 500 m, 25. VIII. 2007. 2 exs., 泉佐野市不動谷・源流, 犬鳴川, 570 m, 1. IX. 2007.

8. *Zaitzeviaria gotoi* (NOMURA) ホソヒメツヤドロマシ

7 exs., 大阪府和泉市塩振トンネル道分岐点, 東榎尾川, 210 m; 7 exs., 塩振トンネル道分岐点, 東榎尾川, 210 m, 6. X. 2007. 9 exs., 旧和泉市キャンプ場上流, 榎尾川, 190 m; 4 exs., 側川溪アセ谷下流, 父鬼川, 210 m, 15. IX. 2007. 5 exs., 和泉市父鬼町乳滝下, 父鬼川, 220 m; 2 exs., 大岩谷合流下・イモ谷合流附近, 父鬼川, 240 m; 2 exs., 白川谷, 父鬼川, 370 m, 18. VIII. 2007. 2 exs., 春木川町ばれとめ地藏, 松尾川, 100 m, 15. IX. 2007. 1 ex., 岸和田市内畑町山滝, 牛滝川, 90 m; 5 exs., 牛滝町・大威徳寺・一の滝～錦秋の滝, 牛滝川, 300 m; 2 exs., 牛滝川上流・ヘアピン上, 牛滝川, 590 m, 25. VIII. 2007. 6 exs., 八王寺橋上流, 津田川, 160 m; 4 exs., 塔原口, 津田川, 220 m; 1 ex., 和泉葛城山・葛城谷ホシキ谷出合, 津田川, 450 m, 15. IX. 2007. 5 exs., 貝塚市上木積, 近木川, 160 m, 28. IX. 2007. 2 exs., 奥水間温泉上・落合橋, 近木川, 170 m, 15. IX. 2007. 6 exs., 稲谷川・稲谷・中ノ谷水源地, 近木川, 180 m; 3 exs., 稲谷川・大川・天神宮前, 近木川, 200 m, 28. IX. 2007. 11 exs., 蕎原, 近木川, 220 m; 6 exs., 蕎原～五本松・東手川本谷林道・本谷・宿ノ谷合流下, 近木川, 310 m; 1 ex., 蕎原～五本松・東手川ワカ谷～本谷, 近木川, 340-330 m, 15. IX. 2007. 4 exs., 泉佐野市不動谷・七宝滝寺不動明王上, 犬鳴川, 240 m; 16 exs., 不動谷・行者の滝上, 犬鳴川, 300 m; 12 exs., 不動谷・トンネル～犬鳴林道分岐, 犬鳴川, 400 m; 3 exs., 不動谷・トンネル～犬鳴林道分岐, 犬鳴川, 420 m, 1. IX. 2007. 5 exs., 和歌山県打田町神通, 二ノ瀬川, 240 m; 10 exs., 栗ノ木川五本松越道分岐, 二ノ瀬川, 270-280 m; 1 ex., 中畑, 二ノ瀬川, 290-300 m, 15. IX. 2007. 1 ex., 泉佐野市土丸, 樫井川, 70 m; 2 exs., 上大木・一土庄橋, 樫井川, 140 m, 1. IX. 2007. 1 ex., 泉南市信達童子畑北, 金熊寺川, 100 m; 4 exs., 堀河谷・堀河ダム上, 金熊寺川, 220 m, 8. IX. 2007. 4 exs., 和歌山県和歌山市滝畑, 山中川, 130



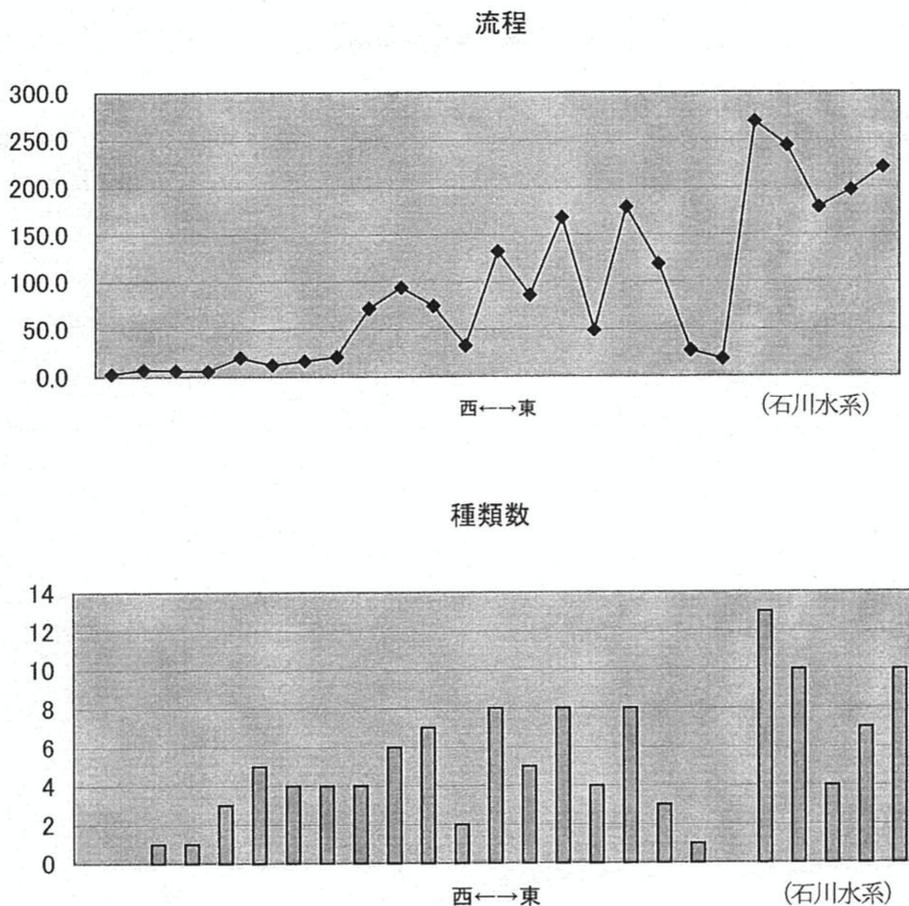


図3. 河川の流程と種類数：源流標高が高く、流程が長いほど種類数も多い。

ゲート上, 犬鳴川, 470 m ; 6 exs., 不動谷・源流, 犬鳴川, 570 m, 1. IX. 2007. 3 exs., 和歌山県打田町中畑, 二ノ瀬川, 290-300 m, 15. IX. 2007. 3 exs., 大阪府泉佐野市上大木・一土庄橋, 榎井川, 140 m, 1. IX. 2007. 1 ex., 泉南市信達童子畑北, 金熊寺川, 100 m ; 9 exs., 堀河谷・堀河ダム上, 金熊寺川, 220 m ; 4 exs., 大阪・和歌山県境阪南市・和歌山市境谷合流点, 山中川, 120 m ; 6 exs., 和歌山県和歌山市滝畑, 山中川, 130 m ; 4 exs., 大阪府阪南市桑畑～鳥取池, 井関川, 110 m, 8. IX. 2007. 9 exs., 泉南郡岬町上孝子～逢帰ダム・浄水場下・並木橋, 大川, 100 m, 26. VIII. 2007. 8 exs., 多奈川東畑・石橋～横手, 東川, 70-80 m ; 1 ex., 多奈川西畑, 西川, 90 m, 8. IX. 2007.

<石川水系> 2 exs., 大阪府河内長野市千石谷・大滝上, 石川, 460 m ; 3 exs., 千石谷・醤油谷合流上, 石川, 530 m, 11. VII. 2007.

10. *Zaitzevia rivalis* NOMURA ミゾツヤドロムシ

7 exs., 大阪府和泉市塩振トンネル道分岐点, 東榎尾川, 210 m ; 9 exs., 塩振トンネル道分岐点, 東榎尾川, 210 m, 6. X. 2007. 15 exs., 旧和泉市キャンプ場上流, 榎尾川, 190 m, 15. IX. 2007. 14 exs., 榎尾山町下, 榎尾川, 220 m, 6. X. 2007. 17 exs., 側川溪アセ谷下流, 父鬼川,

210 m, 15. IX. 2007. 1 ex., 父鬼町乳滝下, 父鬼川, 220 m; 3 exs., 大岩谷合流下・イモ谷合流附近, 父鬼川, 240 m; 12 exs., 白川谷, 父鬼川, 370 m; 14 exs., フルタ谷合流附近, 父鬼川, 390 m; 4 exs., 奥笹尾谷合流附近, 父鬼川, 450 m, 18. VIII. 2007. 3 exs., 春木川町ばれとめ地藏, 松尾川, 100 m, 15. IX. 2007. 12 exs., 岸和田市牛滝町・大威徳寺・一の滝～錦秋の滝, 牛滝川, 300 m; 8 exs., 牛滝川上流・カシ平下, 牛滝川, 500 m; 6 exs., 牛滝川上流・ヘアピン上, 牛滝川, 590 m, 25. VIII. 2007. 1 ex., 八王寺橋上流, 津田川, 160 m; 5 exs., 塔原口, 津田川, 220 m; 12 exs., 和泉葛城山・葛城谷岳ノ谷出合, 津田川, 400 m; 1 ex., 和泉葛城山・葛城谷ホシキ谷出合, 津田川, 450 m; 9 exs., 貝塚市奥水間温泉上・落合橋, 近木川, 170 m, 15. IX. 2007. 22 exs., 梶谷川・梶谷・中ノ谷水源地, 近木川, 180 m; 17 exs., 梶谷川・大川・天神宮前, 近木川, 200 m, 28. IX. 2007. 4 exs., 蕎原, 近木川, 220 m; 9 exs., 蕎原～五本松・東手川本谷林道・本谷・宿ノ谷合流下, 近木川, 310 m; 5 exs., 蕎原～五本松・東手川下サ谷合流附近, 近木川, 520 m; 6 exs., 蕎原～五本松・東手川ワカ谷～本谷, 近木川, 340-330 m, 15. IX. 2007. 1 ex., 熊取町永楽池～永楽ダム・奥山両山自然公園, 見出川, 170 m, 28. IX. 2007. 8 exs., 泉佐野市不動谷・七宝滝寺不動明王上, 犬鳴川, 240 m; 7 exs., 不動谷・行者の滝上, 犬鳴川, 300 m; 36 exs., 不動谷・トンネル～犬鳴林道分岐, 犬鳴川, 400 m; 2 exs., 不動谷・トンネル～犬鳴林道分岐, 犬鳴川, 420 m, 1. IX. 2007. 1 ex., 和歌山県打田町神通, 二ノ瀬川, 240 m; 22 exs., 栗ノ木川五本松越道分岐, 二ノ瀬川, 270-280 m; 4 exs., 中畑, 二ノ瀬川, 290-300 m, 15. IX. 2007. 5 exs., 大阪府泉佐野市土丸, 榎井川, 70 m; 2 exs., 上大木・一土庄橋, 榎井川, 140 m, 1. IX. 2007. 2 exs., 泉南市堀河谷・堀河ダム上, 金熊寺川, 220 m, 8. IX. 2007. 6 exs., 和歌山県和歌山市滝畑, 山中川, 130 m, 8. IX. 2007. 18 exs., 大阪府泉南郡岬町畑南方, 番川, 90-100 m, 8. IX. 2007.  
 <石川水系> 5 (2) exs., 大阪府河内長野市千石谷・大滝上, 石川, 460 m; 4 (1) exs., 千石谷・醤油谷合流上, 石川, 530 m, 11. VII. 2007.

\* ( ) は鞘翅の第1・2点刻列基部が小さい疑似アワツヤ型。

#### <参考文献>

初宿成彦・大阪市立自然史博物館大和川水系調査グループ(プロジェクトY)甲虫班, 2008. 大和川水系におけるヒメドロムシ相および分布について. 大阪市立自然史博物館研究報告(62): 47-64.

## アオキツムネウミハネカクシの岡山県における分布記録 A Record of *Diaulota aokii* SAWADA of Okayama prefecture, Japan

By Haruki SUENAGA and Yasuko KAWAKAMI

末長 晴輝

〒790-8566 松山市樽味3丁目5-7 愛媛大学農学部生物資源学科

河上 康子

〒569-0826 高槻市寿町2-30-9

アオキツムネウミハネカクシ *Diaulota aokii* SAWADA (写真1) は, 満水時に海水面下に水没する岩に付着しているカキやフジツボなどの死殻下に依存して生活し, 干潮時には岩の表面で活動する(丸山, 2002). その特異な生態から分布情報の集積が遅れている種であるが, 現在までに北海道・本州北部(丸山, 2002), 伊豆大島(SAWADA, 1971), 山口県(藤谷, 2006)の記録があり, また瀬戸内海沿岸部に広く生息している事が確認されている(藤谷, 山地 私信). なお, 岡山県内では末長・千田(2006)における倉敷市大島久須美鼻海岸での記録がある. この度, 筆者のひとり



1



2

写真1 (左) アオキツツムネウミハネカクシ

写真2 (上) 生息環境

ある末長は冬季に瀬戸内市前島で本種を採集したので、記録する。

3 exs., 岡山県瀬戸内市牛窓町前島, 11. II. 2007, 末長晴輝採集, 末長・河上康子 同定・保管  
瀬戸内市牛窓町前島では、フジツボやカキの付着している岩礁の岩場(写真2)でカキの死殻をはがすことで得られた。なお、潮はやや満ちていたが、本種の採集にはほとんど支障はなかった。

本種はフジツボやカキの死殻が付着しているような岩場がある磯を生活の場としており、そのような生息環境は自然海岸のみに限定されている。このような岩礁がある場所は限られており、人工護岸のすすんだ大阪湾などではほとんど見られない。また、本種が生息できる岩礁は他の潮間帯性昆虫にとっても格好の生息場所である場合も多く、ある程度保存状態の良い環境とも考えられる。今後も本種を中心とした各種の潮間帯性ハネカクシのさらなる詳しい調査が望まれる。

末筆ながら、本種の同定の確認をしていただいた九州大学総合研究博物館の丸山宗利博士、本報の執筆にあたって多大なる助言をいただいた岡山県の藤谷美文氏と山地治氏に厚くお礼申し上げる。

#### <引用文献>

藤谷美文, 2006. パパチビドロムシの採集記録. 山口のむし, 5: 46-47.

SAWADA, K., 1971. Aleocharinae (Staphylinidae, Coleoptera) from the intertidal zone of Japan. *Publ. Seto Mar. Biol. Lab.* 19(2/3): 81-110.

末長晴輝・千田喜博, 2006. 岡山県のハネカクシの記録. 地表性甲虫談話会報, (7): 3-4, 神奈川.

丸山宗利, 2002. 北海道の海岸性ハネカクシ. 昆虫と自然, 37(12): 17-21.

## コガタノゲンゴロウの屋久島での採集記録

林 靖彦

〒666-0116 川西市水明台 3-7-73

コガタノゲンゴロウ *Cybister tripunctatus orientalis* GSCHWENDTNER は近年個体数の減少が著しいようで、各地のレッドデータブックに絶滅危惧種としてリストアップされているようである。本種は東南アジアをはじめ琉球列島にも広く分布しているようだが、九州周辺の島嶼からの記録がないと思われる。筆者は今年屋久島に旅行した折りに採集したので記録しておきたい。

1 ♂, 安房, 屋久島, 6. V. 2008, 林靖彦採集

採集したのは、安房市街から少し上がった町営のスポーツ公園に作られた小プールからである。付近にもう一カ所小さな人工池があったので、それも含めよく見たのだが、本個体1頭しか見られなかった。

## 朝鮮半島に分布するラミーカミキリ

保科 英人

〒910-8507 福井市文京3-9-1 福井大学教育地域科学部

筆者は、2006年に、ラミーカミキリの福井県内の分布状況を調べ、その結果を保科ら(2007)にまとめた。それゆえに、カミキリムシ全般を必死に追い求めた虫屋としての経歴はないものの、ラミーカミキリについては多少の関心がある。

さて、大林&佐藤&小島編(1992)、日本鞘翅目学会編(1995)、大林&新里編(2007)などの各種の日本産カミキリムシの主要図鑑では、朝鮮半島はラミーカミキリの分布域に含まれていない。しかしながら、最近ひょんなことから、20年近くも前に、既にラミーカミキリが韓国から捕れていることを知った。

2008年5月、筆者は、韓国の Chungnam National University で行われた学位論文審査会の委員として招かれて渡韓した。そして、審査会の後、同大学の Kee-Jeong AHN 博士 および彼の学生と共に、採集を行った。その高速道路での移動の際に、AHN 博士から「暇だろうから、これでも見てろ」と言われて手渡されたのが、韓国産甲虫のフィールド図鑑だった。その中身は、多数の標本写真と主要な種の解説文だったが、ハングル文字が、筆者に読めるわけもなく、文章そのものはほとんど理解できなかった。しかし、その本の中に、ラミーカミキリらしきものの写真を見つけたのである。

帰国してから、AHN 博士の弟子の Sun-Jae PARK 博士に、韓国産ラミーカミキリのことについて問い合わせたところ、英語で書かれて、なおかつ学術ジャーナルに掲載された、きちんとした採集記録論文があることを知った。それが、PARK & LEE (1999) である。これを見ると、ラミーカミキリは、1989年の段階で、既に韓国から1♀が捕れているようだ。浦田(2000)は、1993年に対馬でラミーカミキリが捕れたことを報告したが、本種は、それよりも早い段階で、朝鮮半島に侵入していたのである。

以上、本稿はオリジナルの知見を含んでいないが、韓国におけるラミーカミキリの分布はあまり知られていないと思うので、あえて紹介させていただいた。何かの参考になれば幸いである。

### <追記>

保科ら(2007)は、福井県におけるフィールドワークの結果をまとめたものであるが、調査月日は表で記したものの、肝心の西暦を書き忘れた。保科ら(2007)の研究は、2006年の6~7月に行った野外調査の結果である。別雑誌に掲載された論文ではあるが、ここでお詫びすると共に、調査した西暦を追加記述したと言うことにさせていただきたい。

### <参考文献>

- 保科英人&寺嶋美乃&魚見陽香&山田千恵, 2007. 福井県内のラミーカミキリについて. 甲虫ニュース, (157): 13-19.  
日本鞘翅目学会編, 1995. 復刻版日本産カミキリ大図鑑. 講談社. 565 pp.  
大林延夫&新里達也共編, 2007. 日本産カミキリムシ. 東海大学出版会. 818 pp.  
大林延夫&佐藤正孝&小島圭三編集, 1992. 日本産カミキリムシ検索図説. 東海大学出版会. 696 pp.  
PARK, S.-A. & J.-H. LEE, 1999. Newly recorded two longicorn beetles (Coleoptera: Cerambycidae) from Korea. *Korean Journal of Entomology*, 29: 75-77.  
浦田明夫, 2000. カミキリムシ類2種の分布. こがねむし, (63): 26-27.

### 和歌山県加太からのシリプトウミハネカクシの記録

A Record of *Diaulota uenoi* K. SAWADA of Kada, Wakayama Prefecture, Japan

By Yasuko KAWAKAMI

河上 康子

〒569-0826 高槻市寿町 2-30-9

シリプトウミハネカクシ *Diaulota uenoi* K. SAWADA は、磯の潮間帯に生息するハネカクシで、トカラ列島中ノ島を基準産地として記載された (SAWADA, 1971)。これまでの分布地域として、和歌山県白浜町・鹿児島県徳之島 (SADAWA, 1971; 渡辺, 1974)、四国 (澤田, 1995)、山口県 (藤谷, 2006)、鹿児島県本土部 (丸山, 私信) が知られている。本種は干潮時に現れる磯の岩礁から採集され、瀬戸内海沿岸部ではフジツボ類・カキ類の殻や死骸を剥がしたり、風化した岩を母岩から抜き取った奥から見出されている (藤谷, 2006; 藤谷, 山地, 私信。)

筆者は、本種を和歌山市加太湾で確認したので報告する。加太湾は紀伊水道に面する全長約 1 km

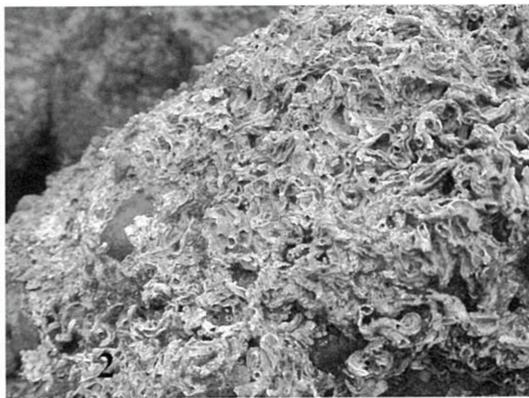


図1 和歌山市加太湾 (左上)

図2 ヤッコカンザシの棲管 (右上)

図3 シリプトウミハネカクシ成虫 (左下)

図4 シリプトウミハネカクシ幼虫 (右下)

の入り江で、南に加太港、海水浴場があり、北の端に小規模な岩礁がある(図1)。この岩礁は干潮時のみに露出する。2007年5月15, 18, 20日の3日間、この岩礁に生息するヤッコカンザシ *Pomatoleios kraussi* の棲管(図2)を、草刈り鎌を用いて削りとり、篩いにかけてたところ本種成虫(図3)が得られた。同時に少数の幼虫(図4)も確認された。採集記録を以下に記す。同定は筆者が行い、標本は筆者が保管している。

<採集記録> シリプトウミハネカクシ *Diaulota uenoi* K. SAWADA

6 exs., 和歌山県和歌山市加太, 15. V. 2007, 河上採集;

6 exs., ditto, 18. V. 2007; 12 exs., ditto, 20. V. 2007.

追加調査として、2007年-2008年の5-6月に、加太湾の北部に位置する和歌山市城ヶ崎・戎崎・住吉崎、大阪府明神崎・豊国崎・観音崎・長崎海岸の岩礁地帯において、同様にヤッコカンザシの棲管やフジツボ類などを調査したが、本種は得られなかった。このことから、紀伊水道沿岸部における本種の生息地域はさほど大きくないことが予想された。また本種はフジツボ類やカキ礁にくわえて、ヤッコカンザシの棲管を生息場所として用いることがわかった。

末筆になるが、本種に関する生息状況をご教示いただいた藤谷美文氏、山地治氏、分布情報をご教示いただいた丸山宗利博士(九州大学総合研究博物館)、文献の入手に援助をいただいた的場績氏(和歌山県立自然博物館)、ヤッコカンザシの同定をしていただき、本稿への助言をいただいた石田惣博士(大阪市立自然史博物館)に心より感謝申しあげる。

<引用文献>

藤谷美文, 2006. ババチビドロムシの採集記録. 山口のむし, 5: 46-47.

SAWADA, K., 1971. Aleocharinae (Staphylinidae, Coleoptera) from the intertidal zone of Japan. *Publ. Seto Mar. Biol. Lab.* **19** (2/3): 81-110.

澤田高平, 1995. 昆虫綱甲虫目. 西村 三郎編著「原色検索日本海岸動物図鑑 II」: 455-478. 保育社.

渡辺泰明, 1974. ハネカクシ漫歩 (4) 潮間帯に生息するハネカクシ. 甲虫ニュース, (21/22): 3-5.

### 三重県尾鷲市からのホソナギサハネカクシの記録

A Record of *Bryothinusa minuta* (K. SAWADA) of Owase, Mie Prefecture, Japan

By Yasuko KAWAKAMI

河上 康子

〒569-0826 高槻市寿町2-30-9

ホソナギサハネカクシ *Bryothinusa minuta* (K. SAWADA) は、北海道から赤道付近まで広く太平洋沿岸部に分布するナギサハネカクシ属 *Bryothinusa* の一種で、本属は砂質干潟から岩礁海岸の幅広い環境で転石の下に見られる(丸山, 2002)。本種は和歌山県白浜町を基準産地として記載され(SAWADA, 1971)、これまでに紀伊半島各地(渡辺, 1974)のほか、伊豆大島(SAWADA, 1971)、神奈川県(SAWADA, 1971; 平野, 1997)、静岡県(多比良, 2000)、島根県(河上・林, 2007)、鹿児島県(丸山, 私信)、トカラ列島中ノ島(SAWADA, 1971)から記録されている。

筆者は三重県尾鷲市で本種を採集したので報告する。2008年8月3日、きしわだ自然資料館友の会が主催する夏の合宿行事において、尾鷲市大曾根浦海岸(図1)での生き物観察が行われた。当地は岩礁や礫を主体とする海岸であるが、干潮時には礫の下部に粗い粒の砂地がわずかに露出する。筆者は直径20-30 cm程度の礫をおこし、露出した砂地から本種(図2)を採集した。採集記録を以下に記す。同定は筆者が行い、標本は筆者が保管している。本種は三重県からの初記録となる。

<採集記録> ホソナギサハネカクシ *Bryothinusa minuta* (K. SAWADA)

7 exs., 三重県尾鷲市大曾根浦, 3. VIII. 2008, 河上採集.



図1 尾鷲市大曾根浦海岸 (上)

図2 ホソナギサハネカクシ (右)



2

採集した7個体のうち2個体はテネラルであり、本種は夏季に新成虫が発生している可能性がある。

末筆ながら報告にあたり、採集時の便宜をはかっていただき、環境写真を撮影いただいた平田慎一郎博士(きしわだ自然資料館)と、文献入手に助力いただいた的場績氏(和歌山県立自然博物館)、本種の分布情報をご教示いただいた丸山宗利博士(九州大学総合研究博物館)に心から感謝申しあげる。

#### <引用文献>

平野幸彦, 1997. 神奈川県 of 海岸性甲虫類. 神奈川虫報, (118): 7-18.

河上康子・林 成多, 2007. 日本海沿岸の海岸性甲虫類の研究 (2) 島根半島. ホシザキグリーン財団研究報告, (10): 37-76.

SAWADA, K., 1971. Aleocharinae (Staphylinidae, Coleoptera) from the intertidal zone of Japan. *Publ. Seto Mar. Biol. Lab.* **19** (2/3): 81-110.

澤田高平, 1995. 昆虫綱甲虫目. 西村 三郎編著「原色検索日本海岸動物図鑑 II」: 455-478. 保育社.

丸山宗利, 2002. 北海道の海岸性ハネカクシ. 昆虫と自然, 37 (12): 17-21.

多比良善晃・松本雅道, 2000. 静岡県における海岸性甲虫相. 常葉学園短期大学付属環境システム研究所紀要・環境システム研究, (7): 39-71.

渡辺泰明, 1974. ハネカクシ漫歩 (4) 潮間帯に生息するハネカクシ. 甲虫ニュース, (21/22): 3-5.

## 2008年度採集会記

吉田 正隆

〒770-0047 徳島市名東町1-295-1

2008年の採集会は、日本鞘翅学会との合同で、7月5～6日に長野県戸隠高原で開催された。私は、7月の2日間だけの採集ではもったいないと思い、あらかじめ戸隠周辺に詳しい幾人かの友人に現地の状況を教わり、6月16～18日に現地入りをして目を付けてあったところに地表・地中のトラップをセットしておいた。本番前日の7月4日に再び戸隠入りをして、先にセットしてあったトラップの回収を済ませておいた。残念ながら、良い場所と思ってセットした地中トラップには然し

たるものも入っていなかった。地表のトラップには佃煮状にハエや甲虫が入っており、とてもソーティングできる状態ではないのでそのままビニル袋に入れて持ち帰ることとした。宿舎付近には車道以外に主要地へつながる歩道が放射線状に延びており、一帯は2次林的なミズナラやカラマツ林で、林床はササで覆われて環境はまずまずの所であった。道脇が谷になり湿りも良さそうなのでバイトトラップのコップを50個ほど埋めて、林床の落ち葉を篩い4リットルほど袋に詰めて宿舎に帰った。夕方には、関東から大木氏他3名の方が先着され、日没と同時に宿舎の戸隠ロッジの裏で発電機を回しての灯火採集を始めた。しかし、周辺環境の割にはどうも成果はいまいちであった。翌5日、早々に昨日埋めたバイトトラップを回収したが、オサムシ、ゴミムシなどの地表性甲虫は皆無に等しい状態で、採集に自信を無くすほどだ。遊歩道脇で枯木のピーティングをしたり、落ち葉ふるいをして昼前にいったん宿舎の戸隠ロッジへ帰った。この頃には各地からの参加者が続々と到着し、受付を済ませてから採集に散らばっていった。採取した落ち葉や回収したトラップ容器などを置き、まだ行っていなかった鏡池から森林植物公園へのルートを夕方まで散策してきた。夕方6時には東は千葉県、西は長崎県までの参加者26人全員が揃い、食堂での夕食、食事をしながらの自己紹介が行われ、深更まで虫談義に花を咲かせていた。明けて7月6日朝食後、宿舎の戸隠ロッジ前で集合写真を撮った後解散した。私は林靖彦氏の車に乗せていただき、野村英世、安井通宏氏と4人で信濃町境の鳥居川に架かる大橋脇から川原に降りて水際のゴミムシや砂地のコメツキムシなどを採した。初めのうちはなかなか見つからなかったが、慣れて来るにつれ、ミズギワゴミムシの仲間やヌレチゴミ、カワチゴミ、マルクビゴミ、等がかなり採集できた。砂地の小さなコメツキムシも採集できた。早めの昼食を奥社入り口脇の店で取り、ここで林氏ら3人に別れを告げ、かねてより気になっていた近くの遊歩道へ入り、道脇の落ち葉を篩ってを袋に詰めた。午後2時頃には大粒の雨で土砂降りとなった。しばらくして雨はやんだが、落ち葉も篩えないほどに濡れてしまったので、奥社前から予定より1時間早いバスで戸隠を後にした。



写真：（7月6日朝、宿舎の戸隠ロッジ前にて）

### ねじればね編集部より前号の訂正のお知らせ

ねじればね 122号に掲載された松本堅一氏の「湯河原火山周辺のオサムシ亜族の分布について」

の本文に、編集部のミスによる文章の欠落があることが判明した。今号にて、それを訂正したい。

編集部として、著者ならびに会員の皆様には、深くお詫びするとともに、今後はこのようなことがないように鋭意努力していく所存である。

(誤) ねじればね 122号 p. 21-22

3, 湯河原火山を含む箱根火山の地形の形成については、久野(1952)により富士山型の大規模な成火山を古期外輪山とし、28~44万年前に複数の中小規模成層火山群が形成され、27~28万年前に、発生した山体崩壊と8~14万年前の再噴火による大量の軽石流の流出により現在の箱根火山の地形が形成されたとする、新たな箱根火山の発達史を提唱した。

(正)

3, 湯河原火山を含む箱根火山の地形の形成については、久野(1952)により富士山型の大規模な成層火山の形成以降陥没により古期外輪山ができ、さらにカルデラ内の楯状火山が陥没し新規外輪山が出来たという三重式火山のモデルが提唱されてきた。その後平田(1999)は、久野の箱根火山形成史を最新のデータの分析に基づき再検討し、富士山型の大規模な成層火山の形成はなく、湯河原火山を古期外輪山とし、44~28万年前に複数の中小規模成層火山群が形成され、28~27万年前に、発生した山体崩壊と14~8万年前の再噴火による大量の軽石流の流出により現在の箱根火山の地形が形成されたとする、新たな箱根火山の発達史を提唱した。

## 虫屋の広場 (46)

### 地域別総合甲虫目録

#### ◎ 区市町村単位目録・小地域目録

##### 01. 岡山県真庭市

・青野孝昭(2007), 岡山県真庭市大原湿原の甲虫相に関する一資料. すずむし, (142): 21-25. [27科, 132種]

##### 02. 山口県萩市

・椋木博昭(2007), 萩市大島の昆虫相. 山口のむし, (6): 118-124. [13科, 43種]

##### 03. 福島県松枝岐村

・草野憲二(2007), 会津駒ヶ岳の甲虫(I).. ふくしまの虫, (25): 24-31. [37科, 120種]

##### 04. 新潟県新潟市

・河上康子・林成多(2007), 日本海沿岸の海岸性甲虫類の研究(1) 新潟市五十嵐浜. ホシザキグリーン財団研究報告, (10): 25-35. [12科, 59種]

##### 05. 鳥根県雲南市

・藤原淳一・林成多(2007), 鳥根県雲南市木次町ふるさと尺の内公園の昆虫相(1) ホソカミキリムシ科・カミキリムシ科・ハムシ科(甲虫目ハムシ上科). ホシザキグリーン財団研究報告, (10): 211-223. [3科, 108種]

##### 06. 三重県鳥羽市

・今村隆一・市橋甫(2007), 鳥羽市答志島の甲虫類(バッタ目・カメムシ目・ハチ目を含む). 三重自然誌, (11): 45-57. [38科, 201種]

##### 07. 東京都八王子市

・芳賀馨(2007), 1980-90年代に高尾山とその周辺で採集した甲虫類. うすばしろ, 34: 1-10. [25科, 85種]

08. 福岡県沖ノ島  
・ 城戸克弥 (2007), 福岡県沖ノ島の甲虫相. *Korasana*, (75): 43–64. [45 科, 252 種]
09. 福岡県東峰村  
・ 城戸克弥 (2007), 福岡県で採集した甲虫類(13). *Korasana*, (75): 35–42. [112 種]
10. 三重県鈴鹿市  
・ 生川展行ら (11 名) (2008), 鈴鹿市のコウチュウ目, 「鈴鹿市の自然—鈴鹿市自然環境調査報告書」(鈴鹿市, 802 pp. A 4 版, 原色図), 第 7 節: 525–691. [108 科, 2082 種]
11. 鳥根県松江市  
・ 藤原淳一・林 成多 (2008), 鳥根県松江市澄水川流域の甲虫. ホシザキグリーン財団研究報告, (11): 239–248. [48 科, 220 種]
12. 新潟県三条市  
・ 桜沢英郎・小池 寛 (2008), 新潟県三条市の甲虫類目録. 越佐昆虫同好会報, (99): 1–40. [45 科, 504 種]
13. 徳島県那賀町  
・ 吉田正隆ら (4 名) (2008), 旧木沢村(那賀郡)の甲虫相. 徳島昆虫, 16: 37–105. [90 科, 1520 種]
14. 京都府舞鶴市  
・ 若狭湾生物同好会 (2008), 舞鶴市字真倉・小路ヶ谷林道産甲虫目録. 地域甲虫リスト, (1): 1–10. 6 color plates. [23 科, 98 種]
15. 大阪府大阪市  
・ 西川喜朗ら (4 名) (2008), 大阪城公園の昆虫相. 「いのちの城・大阪城公園の生きもの」(追手門学院創立 120 周年記念事業大阪城プロジェクト調査報告書, 242 pp.), 121–163. 昆虫綱: 13 目 132 科 440 種. 甲虫目: 150–156, 160. [24 科, 109 種]
16. 広島県安芸高田市  
・ 中村慎吾ら (3 名) (2006), 広島県土師ダムの昆虫類 2005 年の調査結果. 比婆科学, (221): 1–163. コウチュウ目: 36–80, 130–146. [66 科, 587 種]. 合計 [72 科, 869 種]
17. 広島県大竹市  
・ 中村慎吾・辻村匡志 (2007), 広島県弥栄ダムの昆虫類 2005 年の調査結果. 比婆科学, (222): 1–142. コウチュウ目: 31–60, 109–122. [58 科, 422 種]. 合計 [64 科, 711 種]
18. 鳥根県益田市  
・ 中村慎吾・羽尻光宏 (2007), 鳥根県高津川の昆虫類, 2005 年の調査結果. 比和科学博物館研究報告, (48): 103–264. 昆虫綱: 16 目 212 科 1374 種. コウチュウ目: 142–183, 232–246. [56 科, 535 種] 合計 [65 科, 754 種]

◎複数市町村を包含するやや広い地域の目録

01. 鳥根県鳥根半島  
・ 河上康子・林 成多 (2007), 日本海沿岸の海岸性甲虫類の研究 (1) 鳥根県鳥根半島. ホシザキグリーン財団研究報告, (10): 37–76. [24 科, 188 種]
02. 鳥根県隠岐諸島  
・ 林 成多・島田 孝 (2007), 隠岐諸島産水生甲虫仮目録 (2006). ホシザキグリーン財団研究報告, (10): 143–147. [12 科, 60 種]
03. 鳥取県大山  
・ 林 成多・門脇久志 (2007), 鳥取県大山山麓の河川に生息する水生甲虫類. ホシザキグリーン財団研究報告, (10): 149–168. [8 科, 38 種]
04. 山梨県富士五湖  
・ 富士北麓生態系調査会 (2007), 「富士北麓水域(富士五湖)における生態系多様性に関する調査報

告書] 180 pp. 昆虫類: 篠田授樹, 85–103. 甲虫: 91–95. [46 科, 314 種]

05. 東京都奥多摩

・芳賀 馨 (2007), 1970–90 年代に奥多摩で採集した甲虫類. うすばしろ, 35: 1–46. [67 科, 581 種]

◎ 都道府県単位目録

[山口県]

・保阪健市 (2007), 2006 年に山口県各地で採集したコウチュウ類. 山口のむし, (6): 33–41. [36 科, 230 種]

[島根県]

・林 成多 (2007), 島根県産水生甲虫類の分布と生態. ホシザキグリーン財団研究報告 (10): 77–113. [15 科, 102 種]

[福岡県]

・城戸克弥 (2007), 福岡県で採集した甲虫類 (13), *Korasana*, (75): 35–42. [142 種]

[青森県]

・尾崎俊寛 (2007–2008), 村上義千代氏採集の青森県産甲虫類について. *Celastrina*, (42): 33–44. [2006 年度の記録: 34 科, 109 種]; (43): 13–24. [2007 年度の記録: 32 科, 115 種]

[栃木県]

・大桃定洋・高橋敬一 (2008), 2006–7 年に栃木県下で採集した甲虫類. *インセクト*, 59 (1): 17–26. [41 科, 81 種]

[茨城県]

・高野 勉・大桃定洋 (2008), 茨城県産甲虫リスト補遺 (2). るりぼし, (36): 18–37. [73 科, 314 種] (茨城県合計) [115 科, 2722 種]

(水野弘造)

## 日本甲虫学会と日本鞘翅学会の合併問題について

皆様ご承知のように、日本の甲虫学に関わる学会としては日本甲虫学会と日本鞘翅学会があります。両学会はそれぞれに異なる歴史と背景があつて、これまで独自に活動を行っておりますが、以前にも両学会の合併を検討しようとする動きがありました。それを契機として両学会の合同大会を開催したり、合同採集会を恒例化するなど、お互いの交流の機会も増えています。また、会員の中には両学会の会員を兼ねておられる方も多いのが現状です。

このような中、本学会の編集委員から、機関誌である昆虫学評論 (*Entomological Review of Japan*) の発行について、将来を危惧する意見が出されました。一番の問題点は、限られた人材の中で、それぞれに多忙な現編集委員だけでは投稿原稿のチェックや編集業務が滞り、要求されるクオリティを維持するのが困難な状況に至っている点です。学会誌の正常な発行が困難になれば、学会の存在意義が失われかねないことになり、現在学会を支えて頂いている会員の皆さんに多大な不利益を与えてしまうことになります。

この意見を受けて、8月30日に大林会長をまじえて運営委員会で現状分析を行い、意見交換を行いました。その結果、このままでは近い将来に本誌の発行が行き詰まる可能性があるとの危機感を共有し、鞘翅学会との合併も選択肢とすることで概ね一致しました。そこで10月25日には、鞘翅学会会長の新里達也氏をオブザーバーに迎えて、改めて運営委員会で合併問題に関する意見交換を行い、両学会にそれぞれ合併問題検討委員会を立ち上げることで合意に至りました。その後、学会誌の編集に関しては、今年から九州大学総合博物館に奉職された丸山宗利さんが編集委員に加わっていただけることになり、編集体制については今後強化出来る見通しも出て参りましたが、今後合

併問題について前向きに検討していくことについて11月22日に松山で開催された3学会合同大会の総会の場で会員の皆様にお諮りし、ご承認を頂きました。

合併については、国内に甲虫学を標榜する二つの学会が並立して、会員の多くが重複加入しており、会費も二重負担になっている状況を改善するメリットも考えられます。両学会ともに日本の甲虫学の発展に寄与し、会員の利益を護りながら学会の発展を目指す点で基本理念は同じくするところです。それぞれに異なる歴史を持ち、会の風土といったものも異なっていますが、合併を進めることでそれぞれの長所を生かすことも考えられます。検討委員には、大林延夫、林靖彦、谷角素彦、奥田好秀、初宿成彦、保科英人の6名が選出されており、甲虫学会としては、とくに会員の多数を占めるアマチュアの会員にとっていかに魅力のある学会にできるかを主要な視点に据えて、合併の是非を含めて内容や条件などについて今後検討を進めます。会員の皆様におかれましても、この合併問題について積極的にご意見をお寄せいただければ幸いです。

なお、ご意見等は E-mail: hiyorinanami@yahoo.co.jp (ねじればね編集担当：保科英人宛) お願いします。その際には、件名に「合併問題について意見」等の句を入れていただけますと、昨今著しい迷惑メールと混同するおそれがないので、助かります。また、メールをやりとりする環境をお持ちでない方は、ねじればねの巻末に記載された保科の所属先住所に郵便でお送りください。

(日本甲虫学会運営委員会)

## 会員の皆様へ投稿に関する注意事項

ねじればね編集担当の保科英人です。2009年4月以降、下記に記してあるメールアドレス「hhoshina@edu00.f-edu.fukui-u.ac.jp」が変更になります。よって、3月末以降にねじればねへ投稿を予定されている方は、簡易書留による郵送でお願いします。新アドレスにつきましては、次号にてお知らせいたします。

### ねじればね 123号 Nejurebane No. 123

2008年12月25日発行 25. December, 2008

発行者：日本甲虫学会（会長 大林延夫）The Japan Coleopterological Society

発行所：日本甲虫学会 〒546-0034 大阪市東住吉区長居公園 1-23 大阪市立自然史博物館・昆虫研究室気付

Entomological Laboratory, Osaka Museum of Natural History, Osaka, 546-0034, JAPAN

振替口座: 00990-8-39672 URL: <http://www.mus-nh.city.osaka.jp/jcs.html>

Tel: 06-6697-6221 Fax: 06-6697-6225 E-mail: shiyake@mus-nh.city.osaka.jp

編集：保科英人、伊藤建夫、谷角素彦

ねじればね原稿送付先（和文）：保科英人 〒910-8507 福井市文京3-9-1 福井大学教育地域科学部

E-mail: hhoshina@edu00.f-edu.fukui-u.ac.jp (E-mailでの投稿を歓迎します)

入会および会費問合せ先：野村英世 〒590-0144 堺市赤坂台 1-18-5 Tel. 0722-98-4066

(年会費 A会員 5,000円；B会員 6,000円)

昆虫学評論 原稿送付先（英文）：初宿成彦 〒546-0034 大阪市東住吉区長居公園 1-23 大阪市立自然史博物館・昆虫研究室気付